

1. 長岡地域は、本当にたくさんの、さまざまな切り口があります。

国内外のゲストに、この広大なエリアを、どう紹介するか、難しいですが、国内のゲストには、まずは良寛が越後・長岡の人だと説明したいと思います。弥彦山の西の国上山山中の五合庵や乙子神社、寺泊の照明寺・密蔵院、さらに生誕の地・出雲崎、父の出身地にして良寛支援者の多い与板、終焉の地・和島、多くの関連寺院がある長岡と、ここ中越は、良寛が子供たちと遊び、托鉢で歩きまわった町なのです。

良寛については、本ウェブページの文書とともに、長岡地域振興局企画振興部が作成のパンフレット「良寛たずね道」八十八ヶ所巡り の入手をお勧めします。 <https://www.pref.niigata.lg.jp/uploaded/attachment/75647.pdf>

2. 弥彦

- (1) 競輪場
- (2) 弥彦公園
- (3) 弥彦神社

3. 寺泊のトピックス

パンフレット「詩情豊かな寺泊の史跡」の入手をお勧めします。

4. 燕、三条 のトピックス

- (1) 名物のラーメン
- (2) 燕、三条の金属産業の歴史

5. 弥彦神社の見逃すな、見どころ

ご神木讃歌
宝光院
玉の橋

1. 新潟県は 神社数 No1、温泉数 No2の県です。

2. 弥彦

- (1) 競輪場 最初は陸上競技場、それを村が買い取り、競輪場になった。
- (2) 弥彦公園 背景に弥彦山、となりに弥彦神社と、広さを満喫して下さい。
- (3) 弥彦神社

日本一の大鳥居(高さ30m) 厳島神社と同じ両部式(りょうぶ)。上の額は十二畳(5.4m*3.6m) 巨大な2本の柱の各々途中から袖柱を出して、合計4本の足で2本の主柱を支えるように見える、4本足の鳥居の形式。昭和57年の新幹線開業記念。

弥彦神社は多くの神々が祭られているところ。摂社、末社と呼ばれる同居の神様が多数。

御神木は、椎の木。大火で幹のみ焼け残ったが、たちまち新芽が芽吹き、元の姿になった。

近くに、良寛の歌の看板 (*1)

津軽藩から贈られという「火の玉石 (重軽の石)」 重いほうの石を持ち上げられると、思いが叶う、持ち上げられないと、思いは「もう少し待て」ということ。 (*2)

手水舎 作法(*3)



弥彦神社は二礼四拍手一礼。出雲、八海山も同じ。

四拍手を、「人と神の魂」を表わす四つの神に祈ることを意味するという説もある。

すなわち「和」「荒」「奇」「幸」の、4つの魂に各々拍手するのが原型。

～調査 元々神社ごとに異なる作法があったが、明治になって神仏についての法律が定められ、「2礼2拍手1礼」となった。しかし、そのままのしきたりを残すことが許された神社もあった。

それが「三重県の伊勢神宮」、「新潟県の弥彦神社」、「大分県の宇佐神宮」などの社。

弥彦神社には、しめ縄がない、

戦後の一時期、しめ縄講を組織して「しめ縄」を数年間奉納したが、高齢となり途絶えた。

その後も「しめ縄」は用いないという。 もともと「しめ縄」は、別の場所にある。

～<http://yahikosuki.blog.fc2.com/blog-entry-127.html>

弥彦神社では外から入ってくる疫病や災いをもたらす邪気と疫神を防ぐために塞の神を祀り、旧道の要にしめ縄をはり、弊串を建てており、これより内側が神領域となる。神社通りを西に歩き、右の杉並木の道(稚児道)に入って進むと、「しめ縄」がある。村の社の鳥居にあるような、粗末な「しめ縄」である。

本殿の後ろに、天皇のみ入殿の建物、その後ろは神様のみの建物が並ぶ。
現在の建物では、昭和天皇だけが入殿している。

その他の見どころ 御手洗川にかかる玉ノ橋(*4)、弥彦・万葉の道(*5)

～(春日) 玉ノ橋の周辺は、御手洗川の川を含め、美しい場所です。

万葉の道は、海外からのお客様に、絶対喜ばれる場所だと思います。

ワビ、サビとは別の、いにしえから日本美の一端を、話せる場所です。途中にある弥彦山登山道も、いい雰囲気、万葉の道は神社境内、公園と全く違う姿を見せてくれます。今回、案内はなかったですが、弥彦公園のもみじ谷は、紅葉の季節だけでなく、新緑の時期も美しい散策路です。

明治45年大火は温泉街から出火し、本殿も焼失、そのあとに宝物館を造営。

～(春日) ここは、訪れる人も少なく、苔むした庭が、ひっそりとしている。

大正5年に現在の位置に本殿再建し遷座、昨年2015年が御遷座100年だった。

それを記念し改築されたトイレは温水で手を洗える。

土産物店では、冬季、テーブルがコタツ仕様になり、足元が暖かで、

おでん(コンニャク100円)や甘酒(250円)を楽しみながら一休みできる。

弥彦山ロープウェーは冬季も営業することが多く、県内スキー場のロープウェーが乗れないシーズンであり、眺望も絶佳で、海外からのお客様に好評。

3. 寺泊のトピックス

寺泊は、「さかな」だけではありません。

ネット、書物で情報がたくさんありますが、ここでは長岡市寺泊支所産業建設課が発行した、ちょっと詳しいパンフレット「詩情豊かな寺泊の史跡」を添付させていただきます。

4. 燕、三条 のトピックス

(1) 名物のラーメン ～工場からの出前依頼が多く、冷めないよう、伸びないよう、と
いうことで、背脂が多く、太い麺となったという。

(2) 燕、三条の金属産業の歴史

いまま金属加工で世界有数の技術を有する。その歴史も四百年前の和釘から始まり、
最近の伊勢神宮式年遷宮では、三条の金属業 トップが京都 17品目

二位が新潟 16品目 ～ 品目は？

三条は鍛冶屋の技術を極める方向に進んだ ～ 打ち刃物へ
燕は製作品の横展開に進んだ ～ キセル、ヤスリ、そしてスプーンへ
・・・蒲原は信濃川洪水との闘いで米作に期待できず、金属加工などで稼ぐことになる。
仏壇も総合技術が必要な仕事であり、米作の代わりと云える。
織物、繊維業も、長い冬の中で稼ぐことで、風土から生まれた仕事。

新潟に伝統工芸が多い理由が、ここにある。

伝統工芸品（伝統工芸 traditional craft）

補足

(*1) 御神木讃歌 良寛

明快なことばとリズムで綴られており、いつもの良寛でないような歌に感じました。

伊夜比古の 神のみ前の 椎の木は 幾世経ぬらむ
 神世より 斯くしあるらし 上(かみ)つ枝(え)は 照る日を隠し
 中つ枝は 雲を遮り 下(しも)つ枝は 薨にかかり
 久方の 霜はおけども 永久(とこしえ)に 風は吹けども
 永久(とこしえ)に 神の御世(みよ)より 斯くしこそ ありにけらしも
 伊夜比古の 神のみ前に 立てる椎の木

弥彦神社境内の二の鳥居手前左手側に絵馬殿があり、中に入ると正面の鴨居の上に掲げられた大きな木板には、良寛が参拝した折に詠んだ長歌「いやひこにまうでて」が刻まれている。

ももつたふ いやひこやまを いやのぼり のぼりてみれば
 たかねには やくもたなびき ふもとには…

この木板の原跡は渡部(燕市)の阿部家所蔵の卷子本。

(*2) 火の玉石 (重軽の石) のいわれ ～弥彦村HP

慶長年間(1596～1615)、弘前(現・青森県弘前市)の城主、津軽信牧侯が、(中略)彌彦大神の御神威の広大さを聞いていた殿様は、激しく揺れ動く船中から、はるかに弥彦山に向かって鳥居奉納を誓って神助を願ったところ、たちまち海は静かになって、一同は無事、帰国の途につきました。

それからは、毎年使いをつかわして礼参を続けていましたが、(中略)不思議なことに、しばらくすると、毎夜のように、天守閣を中心に城内を二つの火の玉が大きなうなり声を発しながらぐるぐる飛び廻る、という異変が起きました。

城中一同は、毎夜毎夜、この現象にすっかり悩まされるという大騒ぎになりました。

驚いた津軽侯は、さっそく城内をくまなく調べたところ、この二つの火の玉石はちょうど大人の頭ほどの大きさの石であることが判明しました。

(中略)元和3年(1617)9月、めでたく大鳥居を奉納したと伝わります。

同時に、この靈威を示した火の玉石もいっしょに彌彦神社に納められました。

(*3) 手水舎 の作法

1:右手で柄杓を持って水を汲み、左手にかけます。 ～まずは左手が清められました。

(神道では左が神聖なものとされているため左が先)

2:柄杓を左手に持ち替え、右手にかけます。 ～これで左右両方の手が清められました。

3:再び柄杓を右手に持ち替え、左の掌(てのひら)に水を受けて口をすすぎます。

柄杓に直接口をつけるのは厳禁です。～さらに口も清められました。

4:もう一度、左手に水をかけます。～口をつけたので、再度洗い流して清めるわけです。

5:最後に、両手で柄杓を立てて柄杓の柄に水を流します。～手で触った柄杓も
きれいに清められました。

6:柄杓置き場に柄杓を伏せて戻します。～次の方へのマナーでもあります。

※基本的には、最初に汲んだ水でこれら一連の動作を済ませます。

- (※4) 金唐革(きんからかわ) 仔牛などのなめし皮に、銀箔を貼りワニス(ニス)を塗り、
模様を彫った方にプレスして、最後に手彩色して仕上げると黄金に輝く壁皮になる。
金唐皮は16世紀初め、イタリアで生まれ「黄金の皮革」と呼ばれ、17世紀、オランダの
特産となった。非常に高価で、貴族の間では「富の象徴」と呼ばれた。
日本では当初、需要が少なかったが、西洋趣味の流行とともに、煙草入れや紙入れを
始め、陣羽織にまで使用され、爆発的な人気を博した。

～金唐革紙(きんからかわし、Japanese leather paper)もしくは金唐紙(きんからかみ)は
日本の伝統工芸品である。和紙に金属箔(金箔・銀箔・錫箔等)をはり、版木に当てて
凹凸文様を打ち出し、彩色をほどこし、全てを手作りで製作する高級壁紙である。
金属箔の光沢と、華麗な色彩が建物の室内を豪華絢爛に彩る。
現在の金唐革紙復元製作は日本画家の後藤仁を中心に行われた。

(※4) 御神橋、玉ノ橋

古伝には「今の人心の玉ノ橋を求めて神慮に通わしめて真の道を得る心なり」と
書かれてありました。

明治45年に弥彦大火が起きたとき、その時の出火で社殿や境内建造物が
焼失してしまったのですが、明治29年に改築された「玉ノ橋」だけは火難を
まぬがれました。

その後境内拡張があり、現在の清流御手洗川に修理復元されました。

玉ノ橋の周辺は、御手洗川の川を含め、美しい場所で、海外からのお客様に
喜ばれる場所だと思います。

いいところです。ご家族で弥彦方面にお出かけの際は、ぜひ。

(*5) 弥彦 万葉の道

万葉の道も、神社境内と全く違う姿を見せてくれます。

ワビ、サビとは別の、いにしえからの日本美の一端を、話せる、貴重な場所だと思います。
途中にある弥彦山登山道の登り口付近も、木の階段の見える、いい雰囲気です。

ワビ、サビとは別の、いにしえからの日本美の一端を、話せる、貴重な場所だと思います。
各々に添えられている和歌は、弥彦村のホームページで見ることができますので、
興味をもたれたら、ぜひ。

詳細は、こちら http://www.vill.yahiko.niigata.jp/tourism/manyo_road/

－ NO 1 － 万葉仮名 つばき 現代名 ヤブツバキ

巨勢山(こせやま)のつらつら椿つらつ
らに見つつ思(しの)はな巨勢の春野

－ NO 2 － 万葉仮名 まめ 現代名 ヤブマメ

道の辺のうまらの末(うれ)にはほ豆
のからまる君を離(はか)れか行かむ

－ NO 9 － 万葉仮名 あかね 現代名 アカネ

あかねさす紫野(むらさきの)行き標野(しめの)行き野守は見ずや君が袖振る
額田王

－ NO 10 － 万葉仮名 ゆり 現代名 ヤマユリ

道の辺の草深百合(くさぶかゆり)の花咲(ゑみ)に咲(ゑ)まひしからに妻といふべしや

－ NO 15 －

万葉仮名 わすれぐさ 現代名 ノカンゾウ

萱草(わすれぐさ)わが紐に付く香具山の故りにし里を忘れむがため
大伴旅人

－ NO 20 － 万葉仮名 すみれ 現代名 スミレ

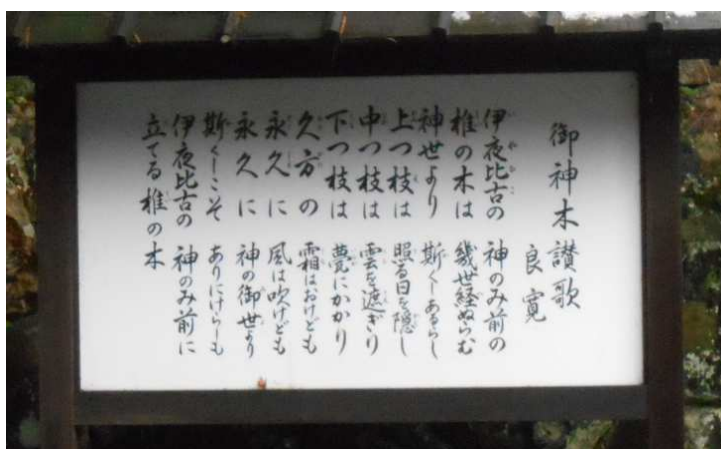
春の野に堇(すみれ)摘みにと来(こ)し吾ぞ野をなつかしみ一夜宿(ひとよね)にける
山部赤人

161217_新潟県通訳案内士協会 地域観光情報研修会の補足メモです

(*1) 御神木讃歌 良寛

明快なことばとリズムで綴られており、いつもの良寛でないような歌に感じました。

伊夜比古の 神のみ前の 椎の木は 幾世経ぬらむ
 神世より 斯くしあるらし 上(かみ)つ枝(え)は 照る日を隠し
 中つ枝は 雲を遮り 下(しも)つ枝は 薨にかかり
 久方の 霜はおけども 永久(とこしえ)に 風は吹けども
 永久(とこしえ)に 神の御世(みよ)より 斯くしこそ ありにけらしも
 伊夜比古の 神のみ前に 立てる椎の木



(*2) その他の見どころ 御手洗川にかかる玉ノ橋、弥彦・万葉の道など

いいところです。ご家族で弥彦方面にお出かけの際は、ぜひ。

玉ノ橋の周辺は、御手洗川の川を含め、美しい場所で、海外からのお客様に喜ばれる場所だと思います。

万葉の道も、神社境内と全く違う姿を見せてくれます。

ワビ、サビとは別の、いにしえからの日本美の一端を、話せる、貴重な場所だと思います。

途中にある弥彦山登山道の登り口付近も、木の階段の見える、いい雰囲気です。

今回、案内がなかったですが、弥彦公園のもみじ谷は、紅葉の季節だけでなく、新緑の時期も美しい散策路で、桜の季節は空いていますし、いいところです。

万葉の道の、植生配置図をコピー添付しました。

各々に添えられている和歌は、弥彦村のホームページで見ることができますので、興味をもたれたら、ぜひ。

<http://www.vill.yahiko.niigata.jp/kankou/main-manyo.html>

宝光院 真言宗智山派

宝光院の創建は建久6年(1196)に源頼朝の発願により僧禅朝が開基したのが始まりと伝えられています。当初は竜池寺と称しましたが弥彦神社の別当寺である神宮寺が繁栄すると次第に衰退し、末寺である宝光院だけを残し廃寺となります。宝光院も明治時代初頭に発令された神仏分離令により一時衰退した後現在地に再興されました。本尊は元神宮寺の本尊だった阿弥陀如来像で、寺宝に毘沙門天像(嘉暦3年作、檜材、寄木造り、像高:187cm—新潟県指定重要文化財)があります。又、境内は元禄2年(1689)に松尾芭蕉と曾良が奥の細道行脚の際宿泊した場所とされ芭蕉碑が建立されています。境内裏には”弥彦の婆々杉”と呼ばれる推定樹齢1千年、樹高40m、幹周10mの巨木があります。境内に入り予想もしていなかった、目の前に広がりそして続く見事な紅葉に圧倒される。紅葉に覆われた一角にやや新しい建立と思われる、かの有名な句を刻んだ芭蕉句碑が佇む。

荒海や佐渡に横多ふ天乃河
「近頃はお寺に参拝もせず、”婆々杉”への道順だけを聞いて、そのまま帰って仕舞う輩がいる」と住職さん。～今度、お参り。

以下の写真画像は、<http://4travel.jp/travelogue/10639708>







<http://www.niitabi.com/yahiko/houkou.html>

宝光院(弥彦村)概要: 宝光院の創建は建久6年(1196)に源頼朝の発願により僧禅朝が開基し大日如来を本尊として祀ったのが始まりとされます。当初は龍池寺と称しましたが弥彦神社の別当である神宮寺が繁栄すると次第に衰退し、末寺である宝光院だけを残し廃寺となります。宝光院も明治時代初頭に発令された神仏分離令とその後に吹き荒れた廃仏毀釈運動により一時衰退しましたが、その後現在地に移され再興されています。本尊は元神宮寺の本尊だった阿弥陀如来像で、寺宝には元々は龍池寺に祀られていた木造多聞天立像(嘉暦3年:1328年作、檜材、寄木造り、像高:187cm)があり昭和41年(1966)に新潟県指定重要文化財があります。鰐口は鋳鋼製、鼓面径53cm、肩厚11.3cm、中世の鰐口としては新潟県最大で元々は明応5年(1496)に弥彦神社に奉納されたものですが、明治45年(1912)の弥彦大火後に宝光院に移されたものとされ弥彦村指定文化財に指定されています。又、境内は元禄2年(1689)に松尾芭蕉と曾良が奥の細道行脚の際、宿泊した場所とされ芭蕉碑(海に降る雨や恋しうきみやど)が建立されています。芭蕉は7月3日に当地に宿泊し弥彦神社を参拝したことが曾良随行日記に記載されています(…三日快晴。新潟ヲ立。…申ノ下刻、弥彦ニ着ス。宿取テ、明神へ参拝。…)。境内裏には弥彦の婆々杉と呼ばれる推定樹齢1千年、樹高40m、幹周10mの巨木があり昭和27年(1952)に新潟県指定天然記念物に指定されています。伝承によると「弥彦の鬼婆」と呼ばれ、悪行の限りを尽くした老婆が大杉の根元を寝座にしていたところ、典海大僧正が説教すると改心し「妙多羅天女」となり今度は善行の限りを尽くしました。その後、罪人が死ぬと死体や衣服などがこの大杉にかけられ見せしめにされ何時しか「婆々杉」と呼ばれるようになったと伝えられています。越後弘法大師二十一カ所第13番札所。宗派:真言宗智山派。

玉ノ橋

<http://www.imm-step.com/shrin03.html>

一の鳥居を入り、表参道を歩くと
すぐ左手に明治29年に改築
された御神橋である「玉ノ橋」が
見えます。
この玉ノ橋は人は渡ることは
できません。

御神橋
玉ノ橋

当神社古記録によると、和銅四年(暦王「玉」)
勅命により宮殿が改められた境内建造物の
中に、御池「玉ノ橋」が記載されている如く、
古くから参道中程に「御神橋」があり、室町
時代の境内古絵図にも描かれている。
「玉ノ橋」について古伝には
今の人心の玉ノ橋を求めて神慮に
通わしめて真の道を得る心なり。
とある。
明治四十五年、弥彦大火の際、社殿始め
境内建造物を焼失した中で、明治二十九年
改築された「玉ノ橋」だけはその難をまぬ
がれた。その後境内拡張、社殿造替事業に際
し外苑弥彦公園に一時移転されていたが、
昭和六十一年の御遷座七十年奉祝を機として
霊峰弥彦山の清流御手洗川に修理復元した
ものである。



古伝には「今の人心の玉ノ橋を求めて神慮に通わしめて真の道を得る心なり」と
書かれてありました。室町時代の境内古絵図にもこの橋が描かれている事から、
この橋は相当な昔から彌彦神社にあったようで、明治45年に神社が大火に
遭って多くの社殿を焼失した際にも玉ノ橋はその難を免れ、その後、境内拡張に
より一時外苑の弥彦公園に移転されていたそうですが、昭和60年の御遷座70
年奉祝を機に、再び清流御手洗川に移転・修理・復元されて、現在に至るそうです。
下を流れるのは御手洗川 (みたらしがわ)。





御手洗 みたらし

神社や寺院で、参拝者が作法に従って手や口を洗う(手水)こと。

また、そのための場所や道具。手水鉢や手水舎に残る。

御手洗池 石川の白山、女神が泰澄を白山に導いたという池

御手洗川 各地にある中で越後一宮、弥彦神社で、玉の橋がかかる清流

この玉ノ橋は神様が渡るために架橋された橋で、信仰上の意味からも、

また橋の構造からも、人間は渡れないという面白い橋です。

室町時代の境内古絵図にもこの橋が描かれている事から、この橋は昔から

彌彦神社にあったようで、明治45年に神社が大火に遭って多くの社殿を

焼失した際にも玉ノ橋はその難を免れ、その後、境内拡張により一時外苑の

弥彦公園に移転されていたそうですが、昭和60年1985年の御遷座70年

奉祝を機に、再び清流御手洗川に移転・修理・復元されて、現在に

至るそうです。